

2 四国遍路

それ四国遍路の密意をいわば
四国は大悲胎蔵の四重円壇に疑いなし
数多くの仏閣は十界皆成の曼荼羅を示す
いわゆる四重の曼荼羅は十界その身平等に
各々八葉開敷の蓮基に坐し、光明常に法界を照らす
本より不生の仏なれば
十界皆成の曼荼羅となつく、八十の仏閣これに呪す
衆生痴暗にしてこの理を知らず
蓮華しぼんで合蓮となり、仏光かくれて闇夜に迷う



今、遍路の功德によって、合蓮開きて仏光現し
再び八葉の花基に坐し、無明の闇晴れて本仏を覚る
本修並べ示すが故に、更に八箇の仏閣を加え
八十八と定め給ふ、是しかしながら
高祖大師の神変加持、衆生頓覚の直道なり
各々早く円壇に入り、自己の心蓮を開覚し
自身の本仏を証知し給えと云うなり



(細田周英／四国礼偏絵図)

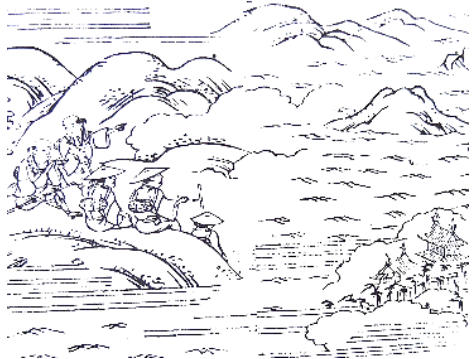
真言密教というは大日法身の説
秘奥の教にして、諸仏内証の
教なるがゆえに秘密の名あり
四国の中、大師御遺跡遍礼の人
絡繹雑沓と連なり重なり
種々の意願をいのり
靈異を感じ
山川雨風をいとわず
霧にやどり
石を枕として



苦辛をわする、是ただ
徳をたつとび、利を見ていさむものなり

遍礼の事、或人のいへるに、大師の御記文とて伝ふるに
身を高野の樹下にとどめ、魂を都率の雲上にあそばしめ
所々の遺跡を検知して、日々の影向をかがずとあり
御遺跡へは大師日々御影向あるにより、八十八ヶ所の内
いづれにてぞは

大師に直にあひ奉ると
いひなせるは此よりなりと
大師、谷深きくつ屋迄
乞食なさせたまひしが
ゆへなりと云て…



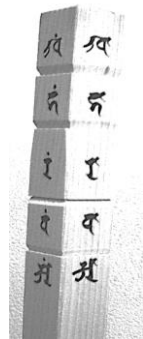
巡礼のはじめたる事
その源、不生なり

南海四国は託生有縁の所に

して、八十八ヶ所の精舎歴々とし緇素、老若、今に歩を運ぶ…
(眞念ノ四国遍礼功德記・四国遍路道指南)

道路に死なん これ天の命なり
月日は百代の過客にして
行きかふ年も また旅人なり
われ日々旅にして 旅をすみかとする
古人も多く旅に死せるあり (松尾芭蕉)

旅ころも 木の根かやの根 いづくにか
身の捨られぬ 処あるべき
捨てこそ 見るべかりけれ 世の中を
すつるも捨ぬ ならひ有とは
益なければ、いづれも劣法なり
念々臨終「この一瞬が死」なり
念々往生「この一瞬が極楽」なり (一遍智真)



いざり立ち めくらが見たと おしがいう
つんぼが聞いたと 御四国のさた (旧：真念庵)

我ありと 思う心を 捨てよただ
身のうき雲の 風にまかせて (一休宗純)

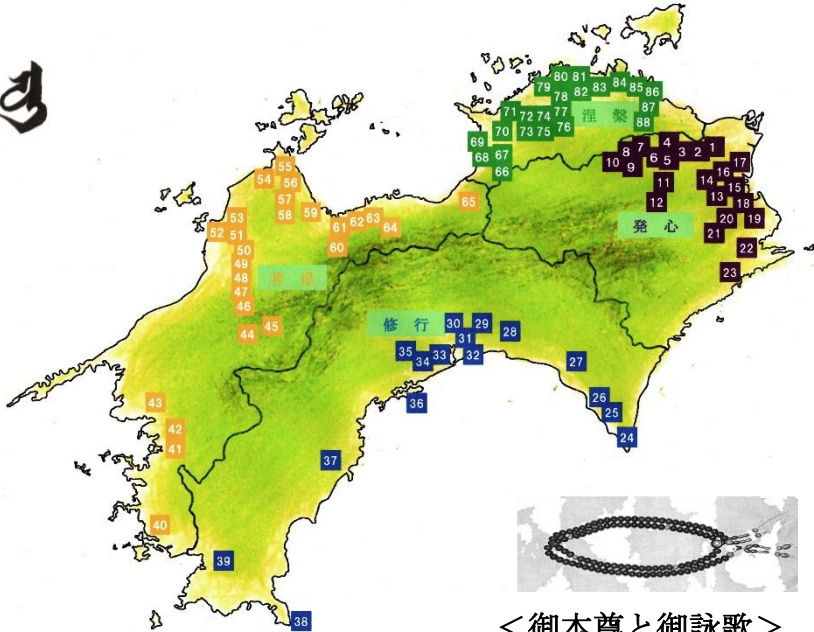
旅うれし 只ひとすじに 法の道
うまれきて 残るものとして 石ばかり
わが身は消へて 昔なりけり (中務茂兵衛)

道のべに阿波の遍路の墓あはれ
風鈴のうつなりたる涼しさよ (虚子)

天下泰平 日月清明 五穀豊穰 萬民快樂 (廻国行者)

焼き捨てよ 日記の灰のこれだけか
分け入つても分け入つても 青い山
濁れる水の 流れつつ澄む
落ちかかる 月を観ているに一人
だまって今日の 草鞋穿く
どうしようもない 私が歩いてゐる
水は流れる 雲は動いて止まない
風が吹けば木の葉が散る
魚ゆいて魚の如く
鳥とんで鳥に似たり
それでは 二本の足よ
歩けるだけ歩け、行けるところまで行け
旅のあけくれ
かれに触れこれに触れて
うつりゆく心の影の ありのまゝに写さう (山頭火)

【四国八十八ヶ所霊場】



<御本尊と御詠歌>

一・霊山寺 釈迦如来

霊山の しゃかの御前にめぐりきて
よろずの罪も 消えうせにけり

二・極楽寺 阿弥陀如来

極楽の みだの浄土へ行きたくば
なむあみだぶつ 口癖にせよ

三・金泉寺 釈迦如来

極楽の たからの池を思へたゞ
黄金の泉 すみたゝへたる

四・大日寺 大日如来

ながむれば 月白妙のよはなれや
たゞ黒谷に すみぞめのそで

五・地蔵寺 勝軍地蔵菩薩

六道の のうげの地蔵大ぼさつ
みちびきたまへ 此世のちの世

六・安楽寺 薬師如来

かりの世に 知行争うむやくなり
あんらく國の 守護をのぞめよ

七・十楽寺 阿弥陀如来

人間の 八苦を早くはなれなば
いたらんかたは 九品十楽

八・熊谷寺 千手観音菩薩

たきぎとり 水くま谷の寺にきて
なん行するも 後の世のため

九・法輪寺 涅槃釈迦如来

大乘の ひほうもとがもひるがへし
てんほうりんの 縁とこそきけ

一〇・切幡寺 千手観世音菩薩

欲心を たゞ一すじに切幡寺
のちの世までの 障とぞなる

一一・藤井寺 薬師如来

色も香も 無比中道の藤井寺
真如の波の たゞぬ日もなし

一二・焼山寺 虚空蔵菩薩

のちの世を 思へばくぎょう焼山寺
死出や三途の なん所ありとも

一三・大日寺 十一面觀世音菩薩

阿波の国 一の宮とやゆふだすき
かけてたのめや此世 のちの世

一四・常楽寺 弥勒菩薩

常楽の 岸にはいつかいたらまし
弘誓の舟に のりおくれずば

一五・国分寺 薬師如来

薄く濃く わけわけ色を染めぬれば
流転生死の 秋のもみぢは

一六・観音寺 千手觀世音菩薩

わすれずも 導きたまへ観音寺
西方世界 みだの浄土へ

一七・井戸寺 七仏薬師如来

おもかげを うつして見れば井戸の水
むすべば胸の 垢やおちなむ

一八・恩山寺 薬師如来

子を産める その父母の恩山寺
訪ふらひがたき ことはあらしな

一九・立江寺 延命地藏菩薩

いつかさて 西のすまゐの我がたつえ
弘誓の船に 乗りていたらむ

二〇・鶴林寺 地藏菩薩

しげりつる 鶴の林をしるべにて
大師ぞゐます 地藏帝釈

二一・太龍寺 虚空蔵菩薩

太龍の 常にすむぞやげに岩屋
舎心聞持は 守護のためなり

二二・平等寺 薬師如来

平等に へだての無きときく時は
あらたのもしき 佛とぞ見る

二三・薬王寺 薬師如来

皆人の 病みぬる年のやくわう寺
瑠璃のくすりを 与へまします

二四・最御崎寺 虚空蔵菩薩

明星の 出でぬる方の東寺
暗き迷いは などかあらまし

二五・津照寺 延命地藏菩薩

法の舟 入るか出るかこの津寺
迷ふ吾身を のせてたまへや

二六・金剛頂寺 薬師如来

往生に 望みをかくる極楽は
月の傾く 西寺のそら

二七・神峯寺 十一面観世音菩薩

みほとけの 恵みの心神峯
山もちかひも 高き水音

二八・大日寺 大日如来

露しもと つみを照らせる大日寺
などか歩みを はこばざらまし

二九・国分寺 千手観世音菩薩

國を分け たからを積てたつ寺の
すゑの世迄の 利益のこせり

三〇・善楽寺 阿弥陀如来

人多く たちあつまれる一の宮
昔も今もさかへぬるかな

三一・竹林寺 文殊大菩薩

南無文珠 三世の佛の母ときく
われも子なれば 乳こそほしけれ

三二・禅師峰寺 十一面観世音菩薩

静なる 我がみなもとの禅師峰寺
浮かぶこゝろは 法のはやぶね

三三・雪蹊寺 薬師如来

旅の道 うゑしも今は高福寺
のちのたのしみ 有明の月

三四・種間寺 薬師如来

世の中に まける五穀の種間寺
深き如来の 大悲なりけり

三五・清滝寺 薬師如来

澄む水を 汲めば心の清滝寺
波の花散る 岩の羽ごろも

三六・青龍寺 波切不動明王

わづかなる 泉に棲める青竜は
佛法守護の ちかいとぞ聞く

三七・岩本寺 阿弥陀如来

六つのちり 五つの社あらわして
ふかき仁井田の 神のたのしみ

三八・金剛福寺 三面千手観世音

ふだらくや こゝは岬の舟の棹
とるも捨つるも のりのさだやま

三九・延光寺 薬師如来

南無薬師 諸病悉除の願いをこめて
まいる我身を たすけまませ

四〇・観自在寺 薬師如来

心願や 自在の春に花咲きて
浮世のがれて すむやけだもの

四一・龍光寺 十一面観世音菩薩

この神は 三國流布の密教を
守らせ給ふ 誓いとぞきく

四二・仏木寺 大日如来

草も木も 佛になれる佛木寺
なお頼もしき きちくにんてん

四三・明石寺 千手観世音菩薩

聞くならく 千手ふしぎのちかいには
大盤石も かろくあげいし

四四・大宝寺 十一面観世音菩薩

今の世は 大悲の恵み菅生山
ついにはみだの ちかひをぞ待つ

四五・岩屋寺 不動明王

だいしょうの いのる力のげに岩屋
石の中にも 極楽ぞある

四六・浄瑠璃寺 薬師如来

極楽の 浄瑠璃世界たくらへば
うくる苦楽は 報いならまし

四七・八坂寺 阿弥陀如来

花を見て 歌よむ人は八坂寺
さんぶじょうの ぬんとこそ聞け

四八・西林寺 十一面観世音菩薩

みだ佛の 世界をたづね行きたくば
西の林の 寺にまいれよ

四九・浄土寺 釈迦如来

十悪の 我身を棄てずそのまゝに
浄土の寺へ まゐりこそすれ

五〇・繁多寺 薬師如来

よろづこそ はんたなり共怠らず
諸病なかれと のぞみいのれよ

五一・石手寺 薬師如来

西方を よそとは見まじ安養の
寺にまいりて うくる十らく

五二・太山寺 十一面観世音菩薩

太山へ のぼれば汗の出でけれど
後の世思へば 何の苦もなし

五三・円明寺 阿弥陀如来

来迎の みだの光の円明寺
照りそふ影は よなよなの月

五四・延命寺 不動明王

くもりなき 鏡の縁とながむれば
のこさず影を うつすものかな

五五・南光坊 大通智勝如来

このところ 三島に夢のさめぬれば
別宮とても おなじ垂迹

五六・泰山寺 地藏菩薩

みな人の まいりてやがて泰山寺
来世の引導 たのみおきつゝ

五七・栄福寺 阿弥陀如来

この世には 弓矢を守る八幡なり
来世は人を 救う弥陀佛

五八・仙遊寺 千手観世音菩薩

立ちよりて 作礼の堂にやすみつゝ
六字をとらへ 経を読むべし

五九・国分寺 薬師瑠璃光如来

守護のため たてゝあがむる国分寺
いよいよめぐむ 薬師なりけり

六〇・横峰寺 大日如来

たて横に 峰や山辺にてらたてゝ
あまねく人を すくふものかな

六一・香園寺 大日如来

後の世を 思へばまゐれ香園寺
とめてとまらぬ 白瀧の水

六二・宝寿寺 十一面観世音菩薩

さみだれの あとに出でたる玉の井は
しらつぼなるや 一の宮かは

六三・吉祥寺 毘沙門天

身の内の 悪しきひほうを打ちすてゝ
みな吉祥を のぞみいのれよ

六四・前神寺 阿弥陀如来

前は神 うしろは佛ごらくの
よろづの罪を くだくいしづち

六五・三角寺 十一面観世音菩薩

おそろしや みつの角にも入るならば
こころをまろく 慈悲を念ぜよ

六六・雲辺寺 千手観世音菩薩

はるばると 雲のほとりの寺に来て
つきひを今は ふもとにぞ見る

六七・大興寺 薬師如来

植置し 小松尾寺を眺むれば
のりの教の 風ぞ吹きぬる

六八・神恵院 阿弥陀如来

笛の音も 松吹く風も琴弾くも
歌ふも舞ふも のりのこゑごゑ

六九・観音寺 聖観世音菩薩

観音の 大悲のちから強ければ
重き罪をも ひきあげてたべ

七〇・本山寺 馬頭観世音菩薩

もとやまに 誰か植えける花なれや
春こそたおれ たむけにぞなる

七一・弥谷寺 千手観世音菩薩

悪人と ゆきつれなむも弥谷寺
たゞかりそめも よき友ぞよき

七二・曼荼羅寺 大日如来

わずかにも 曼荼羅おがむ人はたゞ
ふたゝびみたび かへらざらまし

七三・出釈迦寺 釈迦如来

まよひぬる 六道衆生すくはんと
たうとき山に いづる釈迦寺

七四・甲山寺 薬師如来

十二神 味方に持てる戦には
おのれとこゝろ 甲やまかな

七五・善通寺 薬師如来

我すまば よもきゑはてじ善通寺
ふかきちかいの 法のともしび

七六・金倉寺 薬師如来

まことにも 神佛僧をひらくれば
真言加持の ふしぎなりけり

七七・道隆寺 薬師如来

ねがひおぼ 佛道隆に入りはてゝ
菩提の月を 見まくほしさに

七八・郷照寺 阿弥陀如来

をどりはね 念佛唱ふ道場寺
ひょうしをそろへ 鐘を打つなり

七九・天皇寺 十一面観世音菩薩

十楽の うき世の中をたづぬべし
天皇さへも さすらいぞある

八〇・國分寺 千手観世音菩薩

國を分け 野山をしのぎ寺々に
まみれる人を たすけましませ

八一・白峰寺 千手観世音菩薩

霜さむく 露白妙の寺のうち
み名を称ふる 法の声々

八二・根香寺 千手観世音菩薩

よひのまの たへふる霜の消えぬれば
あところかねの 勤行のこ江

八三・一宮寺 聖観世音菩薩

さぬき一の 宮のみ前にあふぎ来て
神の心を 誰かしらゆふ

八四・屋島寺 十一面観世音菩薩

梓弓 やしまの宮にまうでつゝ
いのりをかけて いさむものゝふ

八五・八栗寺 聖觀世音菩薩

煩惱を 胸の智火にて八栗をば
修行者ならで たれか知るべき

八六・志度寺 十一面觀世音菩薩

いざさらば 今宵はこゝに志度の寺
いのりのこゑを 耳にふれつゝ

八七・長尾寺 聖觀世音菩薩

あしびきの 山鳥の尾の長尾寺
秋の夜すがら み名をととなえよ

八八・大窪寺 薬師如来

南無薬師 諸病なかれと願ひつゝ
まいる人は おほくぼのてら

オン ア ボ キヤ ベイ ロ シヤ ノ ワ マ カ ボ ダラ
マ ニ ハン ド マ ジン バ ラ ハ ラ パー リ タ ヤ ウン
マニハン ド マジンバ ラハラ パーリタヤウン

